医事・文談　九百九十四

《正岡子規（36）の続き》その282

平岸　三八

愚庵十二勝は、帰雲巖、霊石洞、梅花谿、紅杏林、清風関、碧梧井、棗子逕など庵周囲の12ヶ所のやや見るべき箇所を選んだものである。ただし、この「十二勝」は、「帰雲巖」が庭にある大きくもない石であり、「嘯月壇」は物干台のことであったりで、「十二勝」の存在を知って見物にきた人を驚かした。愚庵はなかなか茶目っ気があったらしい。

『松蘿玉液』に次の文が載る。

「愚庵十二勝といふを擇びて詩を作らる。王維の俤をとどめておもしろし。此詩一たび出でて唱和の作山の如く、庵主の徳を慕ふ者多し。此頃、庵主書を寄せていふ、老少不定なり。子が病亦重きを加ふと。願はくは十二勝に和して、わがための記念とせよ。（中略）吾が病稍ニ間あり。此書を見て覚えず微笑を漏らしぬ。乃ち書を返していふ。吾れ詩を善くせず、推敲日を移さば或は終に高嘱に負かん。因りて同人と共に、俳句十二首を作り、次て責を塞ぐ。只ニ俳句は詩に比して暴露（ろばくすき）に傾くの嫌あり。然れども暴露却て是れ禅家の眞面目なりと信ず。伏して嚴斧を請ふ。」

そこで子規は四人の同人と共に一勝毎の俳句を作った。子規の外に、碧梧桐、虚子、把栗（はりつ）である。把栗はあまり有名ではないが、子規門人の福田把栗である。慶応元年（一八六五）生れ、昭和19年（一九四四）没。はじめ漢詩人として名を成し、のち子規門に入り俳句をはじめた。

帰雲巖

秋落葉　石冷えて雲帰るべく　碧梧桐
午頃にしぐれて岩の夕日かな　虚子
吹きたまる岩の窪みの霰かな　把栗
雲消えて花ふる春の夕かな　子規

嘯月壇

物干しに月一痕の夜半かな　碧梧桐
犢鼻褌（とくびん）を干す物干の月見かな　虚子
松はしぐれ月山角に出でんとす　把栗
嘯けば月あらはるる山の上　子規

「十二勝」すべての俳句を載せるほどのこともあるまいと、「二勝」のみをかかげた。

清水の愚庵が、清水寺の周辺で繁華すぎるのと、いかにも手狭であったので、閑静な桃山に地を選び新築移轉することとした。それは明治33年6月であった。資金は清水の愚庵を買却して充て、千坪に近い土地を求め、中央に新に庵を設けた。桃山はのちに明治天皇の陵を築いたほどの、いわば人里離れた土地であった。従って地価も安かったのであろうし、千坪の半分ほどを友人に売却したので、敷地と庵の建築費は浮いた。愚庵はこの桃山の庵で死去したのである。

清水の庵の庭には狭いながらも、柿の木が植えてあったらしい。

新聞「日本」の文芸欄を担当していた漢詩人の桂　湖村は、京都に愚庵を訪ね、愚庵から托された柿十五顆と松茸を携えて、明治30年10月10日子規を見舞った。

柿好きの子規は驚喜して愚庵宛に俳句と短歌を送ったことは本稿（七百七十）に載せた。

その柿はつりがね（釣鐘）ということも分る。

愚庵宛の俳句は10月28日、短歌は同29日の書簡に書かれているものである。

柿を貰ったのは10月10日であるのに、筆まめな子規が、喜びすぎたのか、或は多忙にまぎれて礼状を出すのを怠っていたらしい。愚庵は子規からの礼状が未着なのは、或は病状が亢進したのではないかと案じて湖村に問い合せたらしい。

それであわてて、かなりおそくなって礼状を出したのである。

10月29日の書簡には短歌を、「発句よみの狂歌いかが見給ふらむ」とまで、和歌革新ののろしを挙げた明治31年とは打って変って、謙虚な気持をあらわしているのである。

愚庵の万葉調和歌の製作は、子規より早い。